柏戸の真実 ⑯

伊勢ノ海部屋界わい（上）

今は健診センターに

コロナ禍がいったん収まっていた今年6月、都内両国の旧伊勢ノ海部屋周辺を歩いた。都の緊急事態宣言が解除された直後だけに街にもある程度、人通りが戻った時期だった。

旧住所は墨田区東両国二丁目。今は両国四丁目となる。跡地は医療機関の健診センターになっている。隣の住宅の主婦は「柏戸のいた部屋があった？ 長年住んでいるけど、詳しく分からないわ」と率直だ。無理もない。部屋が他に移転して、もう38年たつのだ。

それでも往時を話してくれる人がいた。跡地の隣に今でもある白鳥製本所。下町の町工場の趣が残っているが、おやじさんは「北葉山（時津風部屋）と柏戸が行ったり来たりしてよく稽古していたもんだよ。終わったら、部屋の前で、まわし姿で何やらニコニコ話していたなあ」。伊勢ノ海部屋のことを聞かれることも最近はめったにないようで、なおさら懐かしそうだ。

両国の部屋跡地は今は医療機関の建物になった

北葉山と切磋琢磨

2人は現役時代、大の仲良しとされ、切磋琢磨した。

入門は同じ昭和29（1954）年で、わずか1場所、北葉山が早かった。いわばほとんど同期だが、3歳年上の北葉山を柏戸は尊重した。一方北葉山も柏戸の素質を認めてよく稽古した。攻めに徹した柏戸と粘り腰を生かした守りの北葉山は好対照だった分、ひかれ合うものがあったようだ。

大鵬とのライバル物語ばかりがクローズアップされるが、同門だった北葉山との出世競争も柏戸には大きな励みとなった。そして、それぞれの昇進を喜ぶ姿があった。

北葉山の大関昇進は柏戸に5場所遅れの昭和36年夏場所後。1㍍70の小柄な体で、故郷・北海道室蘭市では力士になることを誰からも勧められなかった。中学卒業後、地元の鍛冶屋に就職、事務をしながら3年計画で力士になるため上京費用をため、双葉山の時津風部屋を目指した。

珍しいジャケット姿は昭和37年のハワイ巡業。左から大鵬、北葉山、若乃花、柏戸

勝手に家出し力士に

当時の対談で「北海道から内地（本州）に渡るまで5時間かかる。だから朝9時すぎに家を出るとき、〝午後4時まではおふくろに言わないでくれ〟っておじに頼んで出発した。母の反対？ そんな何もない。自分が勝手に出てきた」という言葉に柏戸は感心するばかり。

「自分は相撲はあまり好きじゃなかったが、郡の相撲大会があって、うちの村から出るのが1人、2人足りない。それで兄貴から〝お前出ろ〟と言われたけど、俺は〝いやだ、いやだ〟と逃げていた。母も相撲大会にあまりいい顔をしていなかったし…。でも周りがあまりに〝出ろ〟と言うから出ちゃったんですよ。そしたら勝っちゃったんで、相撲部屋の世話人がおやじとおふくろを口説いて東京に連れて来られちゃった」と最初は消極的だったことをありのままに語っている。

北葉山は「自分は相撲が好きだったが、いざこの社会に入ったら厳しかった。いろんな手前もあるから言わなかったが4、5回やめたくなったことはあった」と語り「でもそこは意地というものがあるから。嫌になる気持ちを押し切って稽古した者が結局上がってくるんだよ」と人間辛抱を正直に語った。

素質に安住できぬ

柏戸は生来のノンビリ屋。入門後、1㍍82から88まで背が伸びて、手足の長さを生かす突っ張りの取り口がうまくはまった。周囲から見れば、うらやましくなるばかりの素質、境遇だったが、それだけに身近に苦労人がいたことは「素質に安住していられない」と自らに気合をつけることにつながった。

部屋のすぐ隣は誰もが知る歴史上の人物のゆかりの地でもあった。

＝敬称略＝

（富樫　嘉美）

北勝関が継承した

○…伊勢ノ海部屋は柏戸の師匠が64歳で亡くなった後、弟子の元関脇・藤ノ川が引き継いだ。当時北の富士（元横綱）が井筒部屋として創設した江戸川区春江町の建物を交代するように稽古場ごと居抜きで引き継いだ。北の富士は「九重部屋」を継承、墨田区内に戻ることになった。春江町では北勝関、土佐ノ海、大碇らが育った。その部屋も今は北勝関が引き継ぎ、都内文京区千石に引っ越して勢、錦木らが所属する。

毎週火曜日付に掲載